

くしまっ子

勝負は一瞬 くしま学カルタ大会で初優勝



素早い反応で札を取る田中さん

市内の児童生徒が郷土の自然や歴史、人物を詠んだ50首の「くしま学カルタ」を使って毎年開催される新春カルタ大会。市内の全小中学校から選ばれた32名がトーナメント形式で対戦し、今年は串間中学校2年の田中乃衣さんが優勝しました。

初めて出場した昨年の大会では2回戦で敗れており、今年は絶対リベンジするという気持ちで臨んだ田中さん。大会の約1カ月前から祖父の幹夫さん

に練習してくれたいと嬉しかった。練習で、7・7の下の句が書かれた取り札を探します。札を並べた後には覚える時間もあり、「自陣の25枚を自然や食べ物などのジャンルで分けて配置しておく」と覚えておきました。

大会までの1カ月前、カルタと向き合ってきた田中さん。「カルタを通じて、串間の素晴らしいことがたくさん知ることができ、何より一緒に練習してくれた祖父が優勝を喜んでくれたのがうれしい」と笑顔を見せていました。

具事リベンジ達成!

優勝できて嬉しいです!



10. 田中 乃衣さん

串間中学校2年。本城出身。お気に入りの札は、かつて日本一の犬男といわれた桑山仰治さんを詠んだ句。この句の取り札の絵も描いている。

伝ってもらい、毎日練習を積んできました。「練習してきたから大丈夫」。そう自分に言い聞かせて臨んだ決勝戦の相手は、北方小6年の清水彩里さん。二人はほぼ互角の勝負を繰り広げましたが、わずかに田中さんが上回り、初優勝を果たしました。

くしま学カルタは、自陣と敵陣に25枚ずつ札を並べ、「5・7・5」の上の句が読まれる段階で、「7・7」の下の句が書かれた取り札を探します。札を並べた後には覚える時間もあり、「自陣の25枚を自然や食べ物などのジャンルで分けて配置しておく」と覚えておきました。

地域おこし協力隊

活動日記

vol.10

つながりがつながりを生む授業

きよやま みさ 清山 美咲さん



現在、地域おこし協力隊の取り組みの一つとして、福島高校の「地域創生学Ⅰ(地域創生クラス)」の授業に関わらせていただいています。この授業は、生徒の主体性を育てることを目的とした対話型授業を実施していくために、福島高校、宮崎産業経

営大学、串間市役所(地域おこし協力隊)の3者連携からスタートしました。現在は、授業の目標である「商品開発を通じた地域創生」に向けて生徒が主体的に考えたアイデアをより良い形で実現していくために、株式会社くしまアオイファーム、新しくしま人応援隊、松米ランド、デザイナーのヒダカアヤさん、畠山容子さんも連携に加わり、地域に支えられる授業として進化しています。

「高校生が主体的に考えたアイデアを応援したい」という想いでつながり、連携の輪が広がったこの授業は、地域で求められている協働のカタチを体現していると実感しました。

1年を通して生徒が作った「5種のおいもタルト(商品名:タルティング・イモ)」は、1月開催の移住体験ツアーで参加者に食べていただきました。

地域創生の取り組みは、だれも正解が分からないからこそ、何度も対話を重ねて合意形成を図っていく必要があります。この時間と労力が必要になる作業を前向きに取り組んでくれた生徒と、生徒の想いを実現するために連携していただいた皆さんに本当に感謝しています。「新しい関係性が可能性を広げていく。」この授業の取り組みから生まれた学びが串間市の新しい可能性につながっていくと嬉しいです。

地域の人達と一緒に支え合いつなぐ 生活支援コーディネーター

顔の見える地域づくりを

団塊の世代が75歳以上の後期高齢者となる「2025年問題」。認知症や一人暮らしの高齢者も増加すると考えられ、生活支援や介護予防の充実した地域の体制作りが急がれています。

このような状況に対応するため、昨年4月、市社会福祉協議会に配置されたのが、地域づくりの調整役を担う「生活支援コーディネーター」です。その生活支援コーディネーターとして、地域づくりに取り組む鍋倉加代子さんは「この仕事は大きく分けると2つの役割がある」と話します。

一つは、地域に暮らしている方の「串間にあつたらいいな」の声を拾い上げ、支援につなげることに「買い物ができない」「ゴミ出しができない」など日常生活の困りごとを支援につなげるのももちろん、生活支援の担い手となる支援する側の人たちを発掘、育成することも大きな役割の一つです。

二つ目は、ネットワークを構築すること。行政やさまざまな機関、地域住民などと連携して、各関係者を引き合わせるなどのコーディネート業務も担います。

今年度は地域に足を延ばし、生活の中で「どのようなことに困っているか」などを調査し、課題を知ることから始めました。その中

で「自分ができることがあれば力になりたいという人」や「串間を良くしたいという人」が、思いのほか多くいるということを知ったという鍋倉さん。「今まで見えていなかった部分であり、支援する側の人たちを発掘するという点では貴重な発見だった」と話します。

支え合いの地域をつくるには、「支援してくれる」地域住民の協力が必要不可欠です。隣近所での声かけやあいさつなど、ちょっとしたことの繰り返しでも高齢者の体調の変化などに気付くきっかけになるかもしれません。そして、「支援してくれる人」と「困っている人」とをつなぐきっかけも必要です。「そのきっかけを作り、地域の方たちと一緒に支え合いの方法を考えていくことが私の役目」と鍋倉さんは話します。

生活支援の全てを地域住民で補えるというわけではありませんが、「行政主体」から「住民主体」にシフトチェンジし、住民参加による支え合いの仕組みを今後作っていくことはなりません。

「やることはたくさんありますが、地域のみなさんと一緒に課題解決に取り組む、地域づくりにつながっていきたい」と鍋倉さん。生活支援コーディネーターとしての挑戦はまだ続きます。

なべくら かよこ 鍋倉 加代子さん (本城地区・上千野)

志布志市有明町出身。結婚を機に串間市に住み始め20年が経過。今では鹿児島県も出なくなり、串間に馴染み、楽しく毎日を過ごしています。



地域に出向き勉強会などを開催します



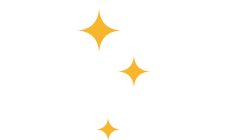
串間のあつたらいいなの声を拾い上げます



串間のあんな人こんな人

People

ピープル



串間で活躍する人を
紹介します

きらめき図鑑

kirameki